

大内初夫著『芭蕉と蕉門の研究：芭蕉・洒堂・野坡 考証と新見』

石井，大

<https://doi.org/10.15017/12214>

出版情報：語文研究. 28, pp.74-77, 1970-05-30. 九州大学国語国文学会
バージョン：
権利関係：



大内 初夫 著

『芭蕉と蕉門の研究——芭蕉・酒堂・野坡——』
考証と新見

石井 太

本書の学問的価値については、中村幸彦先生が序文の中で「実証の努力の積み重ねであるこの書の結論をもって、世に問う自信を認めることが出来る。この書は、外は、学界に裨益して今後の蕉門研究の基根となり、」と述べられている。論文はつぎの事項についてである。

——芭蕉

芭蕉判『十八番発句合』について——発句作者の発見とそれにかかわる一、二の問題

「狂句こがらしの身は」の句について

当代俳壇に対する芭蕉の目

芭蕉「閑閑」の考察

芭蕉の妻子——寿貞・次郎兵衛考——

「幻住庵記」の制作過程について

芭蕉小見

一、「忍ぶの岡」について

二、「銀河の序」の十八里

三、そぞろ神

四、「ほそ道」「五月雨を」の句の改案について

六、「ほそ道」の塩釜の明神と氣比の明神

付芭蕉俳論研究小史

一、研究史

二、俳論探究

II 酒堂

酒堂と難波来遊の芭蕉

高宮酒堂覚書

高宮酒堂年譜

III 野坡

志太野坡

一、伝記

二、人物・作風

野坡の俳神の説について

字鹿の「付句十四躰」と野坡の「俳諧二十一品」について

志太野坡年譜

VI その他

俳人野明について

俳書出版の費用とその部数

○『十八番発句合』の「六番句合」の方の作者に調泉、調盞子破衾子の有ることを発見し、「この三人ないしはそれ以上の人

々の出句による句合を考えてよい」とされ、「十二番句合」の方は「調泉の句のみによる自句合という可能性もないではない」「あるいは「六番句合」と出句者は同じ状態にあるとみてよいのかもしれない」と述べられ、「十八番発句合」の催し主は茶瓢軒調泉であろうと推論しておられる。

ところで調泉が岸本調和の門人であるところから、芭蕉と調和との関係についても言及され、故荻野清氏が「俳人岸本調和の一生」で述べられた、調和は芭蕉一派とは全く没交渉であったという説に疑問を提され、芭蕉が立机したと思われる延宝六年時には、芭蕉と調和との関係が有ったことを考証し、芭蕉の万句興行には調和も関与したであろうことを述べ、調和と芭蕉との関係が『富士右』以下の撰集に芭蕉及びその一門の名が見られないところから、疎遠であったという説は延宝七年以後のことである、と論及されたもの

○「狂句こがらしの身は」の句について、『冬の日』巻頭の芭蕉の発句「狂句こがらしの身は竹斎に似たる哉」の解釈に当り従来この「狂句」の語をめぐって、それを句中の語とすべきか否かについて説の分れるところがあったが、諸資料を引用されてこの語を句中の語とみなすことの正当性を論証されたもの

○当代俳壇に対する芭蕉の目。当代俳壇に対する芭蕉の批判の多くはその内省にむけられ、行動に生かされていたこと、又芭蕉が他門の人々や世の点者達、前句付に興じる俳人達にいかにか批判的であったかは門弟桃隣が点者を望んだ時に芭蕉が洩らした言葉によっても知り得ることを述べられ、自らの文学を「夏炉冬扇のごとし、衆にさかひて用る所なし」と述べて反世俗的

態度に生きた芭蕉の意味を考察しておられる。この様な態度に終止した芭蕉も又一方では俳壇の新傾向に対して強い興味を示し、時流の先頭に立とうとした様子がみられると述べられ景気付の場合を一例として時流を洞察する芭蕉の目がいかに鋭いものであったかを、「去来抄」やその他の資料を引用して詳しく論及されている。

○芭蕉「閉関」の考察。閉関の年時について従来元禄五年、六年の両説が在ったが、元禄六年説が妥当であることを述べられ以下次の点について論及されている。志田義秀、頼原退蔵両博士が閉関の一因とされる、寿貞、桃印、まさ、おふ等の芭蕉の系累の同居は考えられない。次郎兵衛が芭蕉の子であるという説は疑問である。志田、頼原両博士が門人離反のことを一因とされるが、それはこの時期にはあたらなないこと。閉関の理由として考えられることは、芭蕉がこの頃ひどく健康を害していた、猶子桃印や、呂丸の死が芭蕉をいたく無常の想いにかりたて、その上肉体的な疲労も重なって反世俗の心境にあったことを述べられ老の樂しみを求めるためであったことが考えられるとされている。

○芭蕉の妻子。岡村健三氏の、寿貞を芭蕉の甥桃印の妻とし、次郎兵衛、まさ、おふうを寿貞と桃印との間に出来た子供であるという説、次郎兵衛を芭蕉の実子であるという説を批判し、寿貞が若き時の芭蕉の愛人であることは認めても、次郎兵衛・まさ・おふうは芭蕉の子供ではなく、寿貞が他の男と結ばれてその間に出来た子供であるということを考察される。

○「幻住庵記」の制作過程について。「幻住庵記」の三通りの

もの（『猿蓑』所収のもの）、（米沢家所蔵真蹟）、（『芭蕉文考』所収のもの）以上の制作過程について、本文批判を展開しながら論述されたもの、結論は、（『芭蕉文考』所収のもの）——（米沢家所蔵真蹟）——（『猿蓑』所収のもの）とされる。

○「忍ぶの岡」について。芭蕉の「閉関の説」にみられる「忍ぶの岡の人の目も人も人なくは……」の「忍ぶの岡」について、従来それは誤りであるとされてきたが必ずしも誤りではなく、古歌にもこの語はみられることを例示し、事実「忍ぶの岡」が所在することを論証したもの。

○「銀河の序」の十八里。芭蕉の「銀河の序」の一節「彼佐渡が島は、海の面十八里滄波を隔て」の「海の面十八里」という距離は正確に計算されたものではなくて、本土から隔った島までの距離は大抵みな「十八里」と俗に呼んでいたこと、我国の言いならわしであることについての考証。

○「そぞろ神」。「そぞろ神の物につきて心をくるはせ」（おくの細道）の「そぞろ神」を一語の名詞と考える説と、「そぞろ」を副詞にとる説があるが、名詞説の妥当であることを述べられ、「歩き神」「さはがし神」「そぞ神」等と同一系統に立つ神であろうと説かれたもの。

○「ほそ道」「五月雨を」の句の改案について。「おくのほそ道」の代表句の一である「五月雨をあつめて早し最上川」の初案「五月雨をあつめて涼し最上川」から成案にいたる改案の時期を加藤楸邨は「清川あたりで舟を上った六月三日の作であろう」と云うが、改案はさほど早い時期ではなからうことを述べ

られ、古歌の世界における最上川は早川としての詠が多いので芭蕉は本情を重んじて「涼し」を「早し」としたと説かれたもの。

○「ほそ道」の塩釜の明神と氣比の明神。芭蕉はこの二つの明神を対照的に描き出しているとされ、塩釜のそれは連句にたとえていえば表とみられる明るい部分の中に、氣比のそれは裏とみられる沈んだ情緒の中に位置していて、そこに芭蕉の対照的な叙述の妙をうかがうことが出来ると思われたもの。

○酒屋と難波来遊の芭蕉。大坂の俳筵に出席していた酒屋が、芭蕉の病臥後全く姿をみせず、死後の追善俳諧にも姿をみせなかったことに対する理由として、従来旅行中ないしは重患の故にでもあろうかと説かれていたが、その説の当らないことを考証され、酒屋と芭蕉の間に疎隔が生じた結果であろうと説かれるその一因として大坂における之道と酒屋との対立が有ったこと、原因は大坂の俳人車庸が之道から酒屋に接近したこと、そして芭蕉が之道に接近したため、酒屋は芭蕉から遠ざかったものであると論述される。

○高宮酒屋覚書。つぎの事項について述べられたものである。一、膳所帰住の年時と仕官、二、「白馬」の撰集について、三、晩年の酒屋と野坡の交渉、四、死没の年時について、酒屋の膳所帰住は元禄十年冬頃とする、帰住した酒屋は膳所藩に仕官したものであろう。「白馬」の撰集の意図は蕉門俳壇復活を意図したものであること。

正徳、享保と完全に俳壇から遠ざかった酒屋が芭蕉三十三回忌追善興行に野坡の招きを受けて出座して以来両者の間に交遊

が生じた、特に野坡門の高弟風之と親交の在ったこと。

酒堂の没年を元文二年九月十三日没とすること、以上についての論及である。

○志太野坡。伝説、人物・作風について述べられたもの、野坡の年譜と合せて、野坡論の基礎的研究として重要な論文である。

○野坡の俳神の説について。野坡の俳論の中心をなす「俳神」の考えが蕉門俳論の中での様な意味を持つつか、野坡の俳論と芭蕉の考えとの関係等についての論及である。

○字鹿の「付句十四駄」と野坡の「俳諧二十一品」について。

阿刀弘文氏蔵「標門大概 全」が頼原博士によって「芭蕉研究」に翻刻された。頼原博士はそれを字鹿著「付句十四駄」とされ、野坡の影響を指摘されながら「十四体を説いた部分」は字鹿であるとされた、この説が妥当でないことを指摘され、字鹿の「付句十四駄」とするのは野坡の「俳諧二十一品」と呼ばれていたものであることを考証されている。「発句十六篇」「付句十四駄」の流布に露川一派が介在していたこと、中村本「付句十四駄」と三原本「付句十四駄」の本文比較、並びに「二十一品」との関係についての論である。

○俳人野明について。野明という俳号について、並びに野明と去来との特別な関係についての論で、野明の伝記研究についての重要なものである。

その他に「芭蕉俳論研究小史」、「高宮酒堂年譜」、「志太野坡年譜」等の重要なものがあるが、紙数の関係で省略した、解説の要は一見に及ばないこと他の論文も含めてそうである。解説の疎略になったことをお詫び申し上げます。(桜楓社二四〇〇円)

▼受贈図書

昭和四三年十二月～四五年三月

とはずかたり

歌舞伎合帳目録

模吉野

くじゅう総合学術調査報告書

万葉と九州

図書類目録1・2(山川・葉山文庫)

国立国語研究所報告33・34

国立国語研究所年報19・20

九州文化史研究所蔵古文書目録八

村上忠順集

春月 創刊号

訓点語と訓点資料40

近代文学館作品解題昭和期

熊本県言語地図集

大阪府立図書館蔵芝居番付目録

永青文庫細川家旧記古文書分類目録正篇

西大寺金光明最勝王經古点の国語学的研究

遂次刊行物目録昭和42年版

王朝 第一冊

秋桜子句碑めぐり

(附記)右は、寄贈図書の一部です。残り雑誌については、次回に掲載させていただく予定です。

谷口 鉄雄

日本大学図書館

中村 幸彦

大分大学教育学部

春日 和男

九大国語国文研究室

国立国語研究所

国立国語研究所

九州文化史研究施設

村上 正雄

道工彦文顕彰会

訓点語学会

日本近代文学館図書月販

秋山 正次

大阪府立図書館

熊本大学

春日 和男

国立国会図書館

王朝文学協会

石橋ひかる

編集部